

「グローバルティーチャー賞」世界トップ50

松田さん鳥取西高選出

英語教諭



教育界のノーベル賞 山陰初の快挙

優れた教育活動に贈られ、「教育界のノーベル賞」とも呼ばれる「グローバルティーチャー賞」の世界トップ50に、鳥取西高で英語を教える松田裕史教諭(46)が選ばれた。トップ50入りは日本の教育者では7人目で、山陰両県では初の快挙。松田教諭は「今まで出会った先輩や同僚のおかげ。私だけではなく、鳥取県の英語教員が評価された」と喜んでいる。(安井桃華)

同賞はイギリスの国際教育機関「グローバル・財団」が2015年に設立した国際的な賞で、さまざまな環境下で実践できる優れた教育活動に表彰する。参加者が提出したリポートを審査し、上位50人、10人と絞り込み最終的に最も優れた教育者1人を選出する。

今年は130カ国から7千人の応募があり、上位50人の「フアイナリスト」はアジアからは12人、日本からは松田教諭ただ一人だった。

松田教諭は18年にわたる教員人生の中で「ディープ・アクティブ・イングリッシュ」と呼ばれる教育法を作り上げた。入試に対応する英語力を高めるだけでなく、生徒が新たな価値観に気づき、世界の見方を広げることが重視する。

「どつすれば生徒が深い学びに到達できるか、考え続けていた」という。同高に配属され、2019年に京都大学の松下佳代教授が執筆者として携わった学術書「深い学びを紡ぎ出す」を読み、目標の教育を実践するための手がかりをつかんだ。

生徒の学びの育成を重視し、授業に取り組む松田教諭。鳥取市東町2丁目の鳥取西高

生徒の深い学びを実践

日頃の授業では、英語の教科書に掲載されている社会問題や環境問題などといったテーマに対し、大学入試や英字新聞からも「教材」となる文章を収集。生徒にさまざまな知識を英語で取り入れてもらった後、分析結果や自分の考えも英語で発表してもらった。

宇宙開発についてのテーマを学ぶ際には、同高出身の岡島礼奈さんが創業した、人工流れ星を研究する企業のホームページの英文を教材として活用。岡島さんにもオンラインで授業を見学してもらった。

この教育法を実践した結果、生徒たちの英語で書いたり話したりできるアウトプットの力が高まったという。また、読む・聞く・書く・話すの4技能を問う校外の英語の検定でも、全ての技能で成績が伸びた。

「自分のやってきたことを人に見てもらって、自己成長につなげたい」と同賞への応募を決めた松田教諭。「周りの先生から学び続けられたことが評価につながった。今回の受賞は通過点でしかない。まだまだ学んでいきたい」と力を込めた。